
逆転スクール - 消えた少女と七不思議 -

たこやん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆転スクール - 消えた少女と七不思議 -

【Nコード】

N9833Y

【作者名】

たこやん

【あらすじ】

弁護士、成歩堂龍一は悩んでいた。

その原因は扉の前に立っていた少女である。

「逆転裁判」の長編二次小説です。

時系列は「逆転検事2」の後となっております。

0 / 音楽室での出来事（前書き）

この小説では、

逆転裁判4の設定が一切含まれておりません。

なぜなら、その方が小説を書くのに都合が良いからです。

そういうのが嫌な方は、戻るのボタンを押すことをお勧めします。

0 / 音楽室での出来事

中学校。

小学校の教育を基礎とし、小学校の課程を修了した生徒に心身の発達に応じて、

義務教育として行われる普通教育を施すことを目的とする、

前期中等教育段階の学校である。

また、友達などと遊んだり、

部活動に精を出したり。

勉強以外の事も充実している。

また、青春というものも存在している。

それらを楽しみ、遊びと学びを両立したものが充実した生活を送れる。

……が、その裏には「いじめ」という残酷で陰湿な事が行われていることもある……。

？月？日？時？分 学中学校 音楽室

部屋を明るいつ陽が照らしている。

ここ、音楽室には様々な楽器がある。

小太鼓、大太鼓、ピアノ、電子ピアノ、トライアングル、マラカス、数えだしたらきりがない。

本来ならこの部屋は生徒達が歌を歌い、楽器を演奏する部屋のはずだ。

しかし、今この部屋にはそんなことはされておらず、ただ数人の生徒が一人の生徒に雑巾を投げつけているだけだった。

「おらっ！」

一人の生徒の周りを取り囲む生徒の一人がそう言って、一人の生徒に雑巾を投げつけた。

この一人の生徒は、中原絵美と云う名前だ。

「いや！ やめて！」

中原が悲鳴をあげた。しかし、彼女がいくら悲鳴をあげようと誰も来ない。

なぜなら、今は放課後、普通ならば皆部活動に精を出している時間だからだ。

「やめて！」

そう言う彼女を無視して、周りの生徒達は雑巾を投げ続ける。

ついには、その中の一人が彼女に黒板消しを投げつけた。

それは彼女に口元に当たった。

チョークの粉でむせる彼女に、周りの生徒たちの一人が とどめ、と言わんばかりに彼女を蹴った。

彼女は変な声を出した後、床に倒れ込んだ。

そんな彼女を見て、周りの生徒達は馬鹿にするかのように笑った後、部屋を出て行った。

少したって、彼女はふらふらと立ちあがると、

「殺してやる、絶対」

そう呟いて、千鳥足で部屋を出て行った。

部屋の中には、先程の惨状を物語る、雑巾やチョークの粉が落ちていた。

0 / 音楽室での出来事（後書き）

プロローグです。

ちなみに、この小説は昔とあるサイトに登録した未完成の物を、少し改変して再投稿したものです。

1 / 昼下がりの事務所（前書き）

この小説では、忠実にゲームを再現して行くつもりです。
ちなみに、私の文章力はゴミみたいなものです。
それでも良いと言っ方は読んでくださるとうれしいです。

1 / 昼下がりの事務所

11月3日午後1時 成歩堂法律事務所

窓の外では冷たい風が吹いている。

ここ、成歩堂法律事務所には暖房がある。

しかしここの住人は震えていた。

それもそのはず、暖房の電源が入っていないからだ。

ゆえに、少しでも温まろうと綾里真宵は大好物の味噌ラーメンをゆつくりと食べていた。

「なるほどくん。暖房入れようよー」

綾里真宵の職業は少し特殊なものである。

霊媒師、いわば霊能力者。

ゆえに、彼女はちょんまげみたいな髪型に、装束を身にまとい首から勾玉をぶら下げるといふなんとも常人離れした格好をしている。

「駄目だよ。ただでさえお金無いんだから」

トイレ掃除をしながらそう言った彼こそがこの事務所の主、成歩堂龍一である。

弁護士事務所の主なだけあって、彼の職業は弁護士。

青いスーツを着こなしていて、その胸には光る弁護士バッジがつけられている。

ここまでは普通だが、髪型は綾里真宵同様、常人離れしている。

彼曰く、知る人ぞ知る名弁護士らしい。

綾里真宵は、彼の助手であり、師匠の妹でもある。

「そんなー、このままじゃ凍え死んじゃうよー」

麵をゆつくりすすりながら彼女は言う。
その顔はいかにも不満そうだ。

「そうですよ。このままじゃ愛しの真宵様が」

そこまで言った所で成歩堂がその続きを遮った。

綾里真宵と似たような格好をした彼女の名前は綾里春美と云う。
綾里真宵と違う点といえば、年齢と髪型くらいだろう。

綾里春美はまだ若々しい小学生である。
ちなみに、真宵と春美は従姉妹同士だ。

「違うつて！ 別にそんなんじゃない」

成歩堂の言葉を彼女が遮る。

「うふふ、照れなくてもいいですよ」

この小学生、実はすごいおマセさんだ。
成歩堂の悩みの種の一つである。といっても、心底嫌がっているわけではなさそうだが。

そんなやり取りが続く中、事務所の扉が叩かれた。

成歩堂は返事をした後、急いで道具を片付け、扉の前に立った。

一方霊媒師達はいつの間にか完食されている味噌ラーメンの器を片付け、事務所の長椅子に座った。

そして成歩堂が扉を開けた所には意外な人物が立っていた。

1 / 昼下がりの事務所（後書き）

第一話。

とある事務所のお話でした。

今回は主要人物の紹介でした。

2 / 予想外の訪問客（前書き）

二話目です。

予想外の訪問客とは！？

2 / 予想外の訪問客

同日午後1時30分 成歩堂法律事務所

扉を開けた先に立っている少女を見た成歩堂たちは、それぞれ違う反応した。

成歩堂はこの少女のいきなりの訪問に驚き、

真宵はこの少女との再会に喜び、

春美はこの少女の事を知らないので首をかしげた。

「どうも、お久しぶりです」

その少女はショートヘアで特徴的なアホ毛を持っている。

制服を着ていて、ベストがとても似合っていて、髪にはかっぱの髪留めがつけられている。

彼女は17歳で、高校生なのは間違いない。

「やあ、久しぶりだね！ 一体どうしたの」

真宵が彼女にお茶を注ぎに行っている間に、

成歩堂は彼女を長椅子に座らせて、そう質問をした。

その質問に彼女が答えようとする前に、春美が成歩堂に質問した。

「このお方は誰ですか？」

その目は鬼や妖怪が恐怖に顔をゆがめ逃げ出してしまういそうなほど怖かった。

当然そんな目で見られた成歩堂は驚いて、少し冷や汗を流した。

『どうやったらこんな表情になれるんだ！』と彼は心の中で思った。

「え、えーとね、この子はオカルト好きの」

「柊カエデっていうの、よろしくね」

成歩堂が答える前に少女が答えて、手を春美に差し出した。

そう、この少女の名前は柊カエデ、自他共に認めるオカルト好きで、そういう現象を見るためには手段を選ばない。

カエデが差し出した手を春美は少し不審がりながら握ったが、握るといきなり春美は笑顔になった。

『子供の勘か何かでこの人は大丈夫だと思ったのだろう』と成歩堂は思った。

「カエデ様というのですね！ よろしくお願いします、私綾里春美と申します」

春美はそう言った後先ほどよりも良い笑顔になった。

あの鬼のような表情をしていた春美でもこのような顔になることができるのだ。

「ふふ、こちらこそよろしくね」

そんな微笑ましいやり取りをしている中、真宵がお茶を持って来て、カエデに差し出した。

そして長椅子に座った後、真宵が、

「所で、カエデちゃんはどうしてここに来たの？」

と質問した。

これは先程成歩堂が聞こうとしていたことだ。

「あ、そうなんですよ！」

そう彼女は言うつと、両腕を挙げてワシワシと彼女特有の動作をした。その目は興奮に満ちている。

『この目だとオカルトの話だろう』と成歩堂と真宵は思った。それもそのはず、成歩堂と真宵はカエデのオカルト好きは常軌を逸していることを昔の事件で体験しているからだ。

「成歩堂さんは学中学校って知っていますか？」

学中学校。

二年前にこの事務所から小さく見える位置にできた中学校だ。だから当然、成歩堂と真宵、おそらく春美も学中学校の事は知っている。

「うん、知ってるよ」

真宵がそう答えたのを確認したカエデは、興奮した顔で、

「じゃあ七不思議の事は知っていますか！」

と言った。

学校の事を知っていても七不思議の事は知らない成歩堂と真宵は首を横に振った。

それを見たカエデはいかにも不満そうな顔をして、

「えー、もったいないですよー」

と言った。

何がもつたいないのだと成歩堂たちの頭上に疑問符が浮かび上がる。そして不満そうな顔をしていたカエデはいきなり笑みを浮かべてこういった。

「じゃあ教えてあげます！」

成歩堂たちが断る暇もなく、カエデはどこぞやの警備員顔負けのマシンガントークで七不思議を語り出した。

「学中学校には七不思議がありましたね！ あ、七不思議と言っても七つは無いんですけどね！ 全部で五つなんです！ 走る骸骨！ 地下からのうめき声！ 不動の校長像！ 深夜に光る丸！ 開かずの教室！ そうです。面白そうですよね！」

全部言い終わった後の彼女はとても目が輝いていた。興奮している証しだ。

「確かに面白そうだけど、それがどうしたの」

真宵がもつともな事を訊いた。

確かに、そのことがここに來た理由に直結するとは誰も思えない。

「それですね。今夜学中学校に行くことにしたんですよ」

成歩堂達はそれぞれ簡単な返事をした。

「しかしですね……。ちょっと一人じゃ嫌でしてね、あ、怖いとかそんなんじゃないですよ！ ちょっと不安なだけですから！」

『流石のカエデちゃんも夜の学校は怖いのかな』と成歩堂は思った。そして興奮しながらそう言う彼女を見て彼はとあることを思った。出来ればそうではないでほしい。彼はそう思ったが、その期待はすぐ打ち碎かれることになった。

「そこで、一緒に学中学校に行きませんか！」

『やっぱりそうきたか』と思った成歩堂は小さなため息をついた。そんな成歩堂とは裏腹に、真宵と春美は嬉しそうに手をつなぎ合って喜んでいた。

これが大事件の幕開けになるとは知らずに……。

2 / 予想外の訪問客（後書き）

（人物ファイル・柊力エデ「ひいらぎ かえで」
漫画版逆転裁判に出てきた人

以上の人が登場しました。

3 / 地下からの声（前書き）

今回かなり短めです。

次の次から長くなっています。

3 / 地下からの声

某日某時刻 ???

いつからここに居たっけ？

ああ、もうそんなに経つんだな。

みんな元気にしてるかな。

どうしてこんなことになっちゃったのかな。

どうしてこんなことになっちゃったのかな。

誰か助けてくれないかな。

誰か助けてくれないかな。

あ、音が聞こえる。

上だ。あまたあの人か。

あ、今度はなっちゃんの声が聞こえるな。

あはは、なっちゃん呼び出しくらっちゃったのかな。

あはははは、本当に笑えちゃうね。

あつはつはつはつは！

誰かにこの声聞こえてないかな。

お腹空いたな。

早く持ってきてくれないかな。

あはははははははははははははははは！

あはは、本当に面白いね。

笑えちゃうね。

ふふ、ふふふふふふふふふふふふ。

3 / 地下からの声（後書き）

総合評価ポイントを2も貰えました。

とてもうれしいです。どなたか存じませんがありがとうございます。
感想は叱責でも評価でもなんでも常に受け付けています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9833y/>

逆転スクール - 消えた少女と七不思議 -

2011年12月1日20時48分発行